慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ホルシュタインと獨逸の外交政策
Sub Title	
Author	恒松, 安夫(Tsunematsu, Yasuo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1939
Jtitle	史学 Vol.18, No.2/3 (1939. 11) ,p.47(233)- 71(257)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	占部博士古稀記念號
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19391100-0047

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ホルシュタインと獨逸の外交政策

恒松安夫

一八九〇年ビスマルクの失脚以來、一九〇六年彼自身の引退まで、獨逸外交の影武者として最も辣腕を振つた人物は、Baron Friedrich von Holstein であつた。それにも拘らず、彼の名は彼の生存中は獨逸人の間にすら餘り多く知られなかつた。それは彼が黒幕に在つて仕事をし、表面の華やかな權力よりも實力をより多く愛好したからであつたと想像される。

フリードリヒ・フオン・ホルシュタインは舊メクレンブルグ家の一族で、一八三七年に生れた。彼は始め軍人として身を立てることを志したが、彼の兩親は彼に法律を學ぶことを勸めた。十九歳といふ異常な若さで伯林大學を卒業してから、四年間伯林市裁判所に勤務した。一八六〇年、二十三歳にして彼は方針を變へ司法官生活から轉じて外交界に入つた。そして外交官試補として、ペトログラードのプロシヤ大使館勤務を命ぜられたが、其處には既に一ケ年以上も前からビスマルクが大使として駐在してゐた。ホルシュタインとビスマルクとの三十年に亙る關係は斯して始まつたのである。一八六三年最後の

試驗を受けるため伯林に歸り、翌一八六四年デンマーク戰役に聯合軍附として派遣された。次いで倫敦大使館勤務となつたが、數ケ月にしてリオ・デ・ヂャネイロに移され、更にワシントンに轉じた。彼が英語を自由自在に操ることが出來るまでに習得したのはこの時である。一八六七年に合衆國を去つてから、暫は、スツットガルト、フロレンス、コペンハーゲン等の各地に勤務した。

一八七〇年に佛蘭西との戰爭が起つた時、ビスマルクはペトログラードで彼の部下であつた頃、その前途を囑目した青年書記官ホルシュタインのことを想ひ出し、一八七一年の始め、ヴェルサイユのプロシヤ外務省本部に彼を呼び寄せた。未だ少壯外交官の域を脱しなかつたこと故、重要な任務を任せられた理ではなかつたが、着任數日後には早くも彼の上官は彼の才能の凡庸ならざることを認めた。(註一) 彼の簡明直載な文筆の才能は巴里陷落前後に於ける覺書や書簡の記草に最も役立つた。戰爭が終り、ビスマルクが歸國した後、ホルシュタインは占領地帶の總督 General von Fabrice 附を命ぜられて Soisy に滯在した。當時巴里はコンミューンの掌中に在り、コンミューンの總師 Général Cluseret は早速獨逸軍當局との接近を計つた。そこでビスマルクは四月十日ファブリセ將軍に訓令して、如何なる申出をも聽取したる上、伯林に取次ぐ旨の回答をなさしめた。四月二十六日クリューズレ將軍の訪問を受けて、これに面接したのはホルシュタインであつて、その時のクリューズレ將軍の申出は、先づコンミューンとの間に協定を結びたる後、獨逸はコンミューンとヴェルサイユの國防政府との間の仲裁を企てるといふ案で

あつた。勿論ホルシュタインはクリューズレの申出をファブリセを通じてビスマルクに報告したが、ビスマルクが回答を與へる迄もなく、コンミューンは政府軍のために潰滅せしめられた。

戰後ホルシュタインは二等書記官に昇進して、巴里獨逸大使館勤務を命ぜられた。それは彼がヴェルサイユに於てビスマルクの側近で仕事をしたために、ビスマルクの彼の才幹に對する囑目が一層高まつた結果であつた。敗戰國の敵首府に駐在した獨逸帝國初代の大使の地位は頗る困難に富んでゐたが、ビスマルクは Graf von Harry Arnim を羅馬から轉任せしめた。この人選はビスマルクに取つて大なる失敗であつて、彼の回想錄中にも多くの紙數を費してこの問題を記述してゐる如く、アルニム事件として知られる問題を惹起した。この問題の抑々の發端はアルニムの野望とそれに對するビスマルクの猜疑心であつた。(註二) 駐佛大使アルニムの對佛政策はビスマルクのそれと甚しく相違し、獨逸政府の政策はチェールの共和政府を支持するに在つたにも拘らず、アルニムは佛蘭西の王黨を援助して王制の復活を劃策する方針に出た。アルニムのこの獨斷行爲に關する情報をビスマルクに送つた者は實にホルシュタイン二等書記官であつて、これによつてビスマルクはアルニムが秘かに彼の地位を狙つて劃策しつゝあるとの信念を強め、益々アルニムに對する憎惡と敵意を固めた。

一八七四年ビスマルクは遂ひにアルニムを巴里からコンスタンチノープルに左遷し、Fürst von Hohenlohe を後任とした。ホーエンローエは伯林からの訓令に接し、それに關連して前任者が獨逸外務省

から受取つた通諜を參照する必要を生じたので、其等の文書を探したけれども發見することが出來なかつた。その報に接したビスマルクはアルニムに若しや誤つて公文書を持ち去つたのではないかと訊ねたところ、アルニムはそれ等の文書が宗教問題に關するものであり、加ふるに大使の實弟ホーエンローエ大司教に關係するもので、後任者に見られることを好まなかつたため、自ら携行した旨を冷淡に答へた。ビスマルクは速刻それを巴里大使館に返還すべきことを命じたが、アルニムは其等の文書は私物であるとて、ビスマルクの命令を峻拒した。そこでビスマルクは國家の公文書を運び去つた廉により、アルニムを起訴し、被告は懲役三ケ月の判決を下されたが、瑞西に逃亡し、亡命中失意の裡に死去した。

ビスマルクが國家の權力を顯示した許りでなく、私敵を打倒することも出來たこの事件に、ホルシュタインは證人として法廷に立たされた。アルニムの辨護士はホルシュタインをビスマルクのスパイとは云はないが、彼の上官の知らぬ裡にウィルヘルムシュトラーセに報告を送り、それがビスマルクとアルニムの反目に油を差したと法廷で陳述した。これに對してホルシュタインは自分も巴里大使館全員も伯爵を甚く讃美したと冒頭して、自分は首相又はその側近者に一度も報告をしたごともなければ、報告を要求されたこともないと答へ、一八七二年春自分が伯林に居た當時、首相が辭意を抱いてゐると噂された際に、自分はアルニム以上に好適な後繼者はないと信じた。然るに一八七二年秋 Varzin 訪問から巴里に歸つて後は、大使の意見が、講和を締結しそれを實行する如何なる政府をも援助することをチェー

ルに約束した首相の意見と甚しく相違してゐることを發見した。チェールはビスマルクの意見通りに實行したにも拘らず、アルニムは政府の變更を希望したと陳述した後、更にホルシュタインは次の如き陳述をなした。

余は彼の意見に反對であつたが、それが彼の確定意見であることを間もなく悟つた。彼の行爲は二人の中の孰れが帝國を支配すべきかの問題を惹起した。余は十四ヶ年間首相と密接な關係に在つた。余は余の印象を數人の友人に書き送つた。其後余はアルニムと語り、余の地位の變更を希望すると告げた。彼は斯る處置に何等の理由を認めなかつた。然しこの會見は余に彼が非常に功妙に振舞はなかつたことを感じさせた。この印象は余が彼と首相との關係の非常に緊迫せることを知るに及んで確認された。アルニムは紛爭の總ての原因を余に歸した。この非難は文書自體によつて答へられる。一八七三年一月以降余と彼との社交關係は完全に斷絶した。一八七三年秋余は伯林に於て正面衝突の起つたことを知つた。總ての人々がそれに就いて噂をした。余は兩者の間に介在することが不可能であつた。余は更迭を希望したが、友人等は余が困難な任務に僻易したらしく見へるだらうとの意見に一致した。それ故に余は現職に踏み止まる決意をなし、同時に余の意志と態度とが曲解されざるやうに行動する決心をなした。余は巴里に歸るや、伯爵夫人ではなく彼を訪問した。それは吾々の關係を精算し、彼に余の更迭を行ふ機會を與へんがためであつた。余の同僚が余に余の上官を訪問することを忠告した時余は答へた。

「否、余は僞善者たらんよりは寧ろ野人たらん」と。

この場合に於けるホルシュタインの行動は當時樣々に判斷された。佛蘭西でも當然裁判に對して多大の興味を喚起したが、Valfrey は Le Procès d'Arnim の序文に於てホルシュタインのスパイ行爲を辯護し、彼は公然とアルニムに反對したと述べた。他方、獨逸に於てはホルシュタインの態度は一般に不評であつて、Baron von Eckardstein は「回想錄」中に、「余はホルシュタインがアルニムに對して證言を與へた時の法廷の光景を記憶する。余はビスマルクの命令により彼が組織的に彼の上官に對してスパイを働いたことが判明した時の、傍聽者等の興奮の模樣と反感の表情とを想ひ起す」と記してゐる。(註三) 兎に角、彼の行爲は彼の人格に永く一つの汚點を留めたことは事實で、そのために彼は陰鬱な一種の遁世家となつた。

ホルシュタインはアルニムの放逐後尙二年間巴里に止つたが、ホーエンローエ公の下に於ける彼の行動は、前大使時代の彼の經歷によつて生じた不評を一層强めた。この頃は直接首相と文通するやうになつたホルシュタインに對して、佛蘭西官邊の一部でも注目し、ホーエンローエ公夫人に對して秘かに好意的忠告を與へる者もあつた。公爵夫人は終生彼を好まなかつたが、公爵自身は彼に全幅の信賴を繫いでゐたやうであつた。公爵の日記の中には屢々ホルシュタインと會食をしたり觀劇をしたことが記され、一八七五年十二月十八日の條にはビスマルクを訪問した際に彼を一等書記官に昇進せしむることを

進言したと記してある。

ホルシュタインは巴里在勤五年にして一八七六年ウィルヘルムシュトラーセに召喚され、再び外國勤務とはならなかつた。彼は首相ビスマルクに忠勤を抽んでたので、首相は彼を深く信頼して、彼には祕密を打明ける程度の友誼を示した。一八七八年の伯林會議には獨逸代表の秘書官の一人として、原案や覺書の起草に彼の文才を縱横に驅使することが出來た。また一八七九年首相が露西亞の脅威に備へるため墺地太利と防禦同盟を締結することに就いて獨帝と意見を異にし苦境に陷つた時、ホーエンローエ公をして皇帝を説得せしむることをビスマルクに進言したのはホルシュタインであつた。當時賜暇歸國中のホーエンローエ公はビスマルクの招電に應じてガスタインに赴いたが、ビスマルクとの會見に先立つて公爵に會見して狀勢を説明したのはホルシュタインであつた。ホーエンローエ公は劈頭ホルシュタインに對してビスマルクの方針に贊成し難い旨を告げたが、ガスタイン到着の翌日には完全に意見を變へて、皇帝説得の大役を引受けた。(註四)

二國同盟が成立して間もなく外相 Bülow が死んだので、一八七九年十月二十八日ホーエンローエは諸方面から後任外相となることを勸説された。その翌日ホーエンローエはビスマルクを訪ねてファルツィンに赴いた時、其處にホルシュタインが居り、彼は外相就任の交渉を受けた際は是非共受諾することをホーエンローエに頻りに力説した。ビスマルクが正式に外相就任の交渉をなした時、ホーエンローエ

公は俸給の不足を口實に就任を拒絶した。その裏面には外相の椅子が夫の力量には過重であると考へてゐた公爵夫人が、兼ねて彼女の嫌惡するホルシュタインが差出がましく夫に外相就任を勸說したことに對して强い反感を抱いたことが手傳つてゐると考へられる。そこでビスマルクは Graf von Hatzfeld を外相に任命した。

ビスマルクが時に數ケ月も伯林を留守にすることが屢々あつたので、當時外務省の仕事は複雜してゐた。ファルツィンのビスマルクからは殆ど毎日訓令が到着したが、省內にはそれを理解する者は一人も居なかつた。少くとも四人の次官が居ると同樣の狀態であつた。卽ち正式の次官たるブッシュ以外に、ファルツィンには Herbert Bismark が居り、本省には Rantzau とホルシュタインとが居た。彼等は誰も文書を閱覽せず如何なる事が起りつゝあるかも知らなかつた。若し首相が亂暴な訓令を發すれば、彼等はそれを一層亂暴に實行した。一八八四年末にはハッツフェルトとホルシュタインとが外務省の仕事の牛耳を攝り、殊にホルシュタインの嬌傲な態度は同僚から相當に憎まれた。

一八八五年ビスマルクは駐英大使 Graf von Münster の手腕に飽き足らず、彼を佛蘭西大使に轉じて外相ハッツフェルトをその後任とし、息子のヘルベルトを外相の椅子に据へた。新外相はホルシュタインを次官に任命し度いと考へたが、ホルシュタインに對する周圍の反感が餘りにも强いため思ふ通りに行かなかつた。然しヘルベルトはホルシュタインと完全な調和を保ちつゝ仕事をなした。

恰度此頃皇子ウィルヘルム（後のウィルヘルム二世）が首相ビスマルクを後見として外務省の仕事に携はることとなつた。從つて皇子はホルシュタインとも接觸するやうになつたが、その頃の印象を後年彼の回想錄中に次の如く述べてゐる。「彼がホルシュタインのところにやつて來た時に、彼の言葉を通して一つの警告が響ひたやうに余には考へられた。余がビスマルク仲間と益々親しくなるに連れて、ホルシュタインは一層卒直に議論した。彼は頗る怜悧で、頗る勤勉で、甚しく生意氣で、疑惑に滿ち、空想に左右され、敵慨心に富んでをり、それだけに危險な人物であつた。ビスマルクは彼を鬘狗の眼を持つた人間と云つた。余はこの種の人物を回避するのが賢明であつたであらう。後年の辛辣な非難が既に熟しつゝあつた」[註五]

この頃ホルシュタインは名實共に外相に次ぐ實權を掌握してゐたので、高等政策の論議には重要なる役割を演じた。一八八七年の三國同盟の更新は、伊太利が要求を擴大し、墺地太利が其等の承認を肯じなかつたために紆餘曲折に富んだ。ビスマルクは佛蘭西と露西亞とからの攻擊を怖れて、伊太利の要求は殆ど悉く承諾し、且つそれを墺地太利にも承諾させようとした。ホルシュタインはこの時墺地太利說得に一役買つた。彼は墺國大使 Graf von Széchenyi と會談して、若し墺地太利が露西亞とのブルガリヤ問題の解決に失敗し、同時に伊太利との同盟を失ふやうなことがあれば、墺地太利は一體どうなるだらうかと質問し、伊太利に對しては何等信を措くことが出來ないとのセーチェニー大使の答へに對してホ

ルシュタインは、問題は恆久的な同盟ではなくて、中世紀の傭兵の如き有給の補助軍團を獲得することであると告げた。

一八九〇年三月ビスマルクの隱退は、ホルシュタインの生涯に一つの轉期となつた。彼はこれによつて自らが突然獨逸帝國の外交政策を指導する立場に在ることを悟つた。ビスマルクは總ての舊配下に一蓮托生を期待することは出來なかつたが、彼の心中には多くの疑心暗鬼があつた。就中、彼はホルシュタインを以つて自己の失脚を劃策した一人と見做して、最も激烈な憤慨を覺へた。ビスマルク夫人がホルシュタインが暫時彼等の家に近づかないと語つた時、ビスマルクは Ya, er hat immer eine feine Nase gehabt と云つた。エッカルトシュタインはホルシュタインがビスマルクを失脚させた陰謀家の仲間であつたと斷じてゐるが、Maximilian Harden はホルシュタインがビスマルクの辭職の工作をしたこともなければそれを希望もしなかつたといふことを何回となく述べた。皇帝と首相の正面衝突の危險を認めた時、ホルシュタインは爆發を防ぐため父を伯林に呼び還すことをヘルベルトに勸說した。又老首相が樞密院に於てなした演說と非難に就いて若い皇帝が不平を漏らした時、ホルシュタインはヘルベルトに書簡を送つて、個人的には何を云はうと構はないが、第三者の面前での非難や諫言には皇帝は耐へ難いといふことを父に說明するやう勸告したと、述べてゐる。然し一八九〇年三月十五日以後はホルシュタインはビスマルク派とは最早何等の接觸を持たなかつた。ヘルベルトが外務省の官吏のために告別晩餐會

を催した時、ホルシュタインは Lindau Kayser Raschdau 等と共に招待に應じなかつた。此等の四名は特別に老公爵の寵愛を蒙つた人達であつた事を憶へば、ビスマルクがハルデンに向つてホルシュタインの事を「彼は自分の門下生といふよりは寧ろアルニムの門下生であつた。彼は穩れた役に立つだけで、絞レンズの汚點を持つてゐる」と苦々しげに語つた言葉が全然彼の僻とは思へない。

皇帝はビスマルクの後任として Graf von Caprivi を選んだが、父に詢じて外相を辭したヘルベルト・ビスマルクの後任の選定は一層困難であつた。ホルシュタインはビスマルク家に對する氣兼ねと、外相として必要な雄辯と社交性を缺いてゐると自ら考へて、自身は就任を辭退したが、Alvensleben が辭退した後ベルヘムと共に Freiherr von Marschall を推した。(註六) マルシャルは聯邦議會のバーデン代表者であつて、フリードリッヒ大侯は彼が雄辯家で經濟問題に通曉してゐるとの理由で外相の後任に推薦したものであつた。

ビスマルクが辭職するや否や獨逸の外交政策に顯著な變動が現はれ、ビスマルク派はその首謀者がホルシュタインであるとして憤激した。ホルシュタインは一八八七年迄は歐羅巴の外交界に於けるビスマルクの總ゆる重要なる動向を是認してゐたが、この年露西亞との間に再保證條約が成立した時、ホルシュタインはビスマルクの違算であると感じた。ブルガリヤ問題に關して墺露の關係が頗る切迫したので、一八八一年の三帝同盟の第二次更新は問題外であつて、そのためビスマルクは出來るだけ破綻を免

れる決心をした。彼の採つた處置に就いて墺帝フランシス・ヨセフに通告したいといふビスマルクの希望は露帝によつて阻止された。この祕密の中に藏された危險の方が、フランスの攻擊を受けた時に中立を守るといふ露西亞の約束による利益を壓倒するとホルシュタインは考へた。「この約束から確實なものは何等期待されない。若しそれが漏洩すれば、我々は僞れる友としての汚名を著る」とホルシュタインは考へた。ビスマルクが辭職した時、再保證條約を更に三ケ年間繼續することに皇帝は承認を與へ、文書に調印することだけが殘されてゐた。ビスマルクはこの條約の繼續を熱望したので、彼の息子のヘルベルトを彼よりも一兩日間長く外相の椅子に踏み止まらせて、その間に條約更新の手續を完了させやうと計つた。然しビスマルク家の勢力は既に失墜してゐた。父宰相が辭職した翌日ヘルベルトが條約書類を求めた時、其等がホルシュタインの室に在ることを告げられた。彼は態々ホルシュタインの室まで出向いて行き、其場に緊迫した光景を現出した。カプリヴィは最後の決斷を下すに先立つて、外務省の省議による意見書を徵した。省議は一致して條約の更新に反對で、駐露大使で、一八八七年にはその締結を援助したSchweinitzすら反對意見に合流した。そこでカプリヴィは關係が餘りに錯雜し過ぎてゐると彼一流の簡單な說明を加へて、條約の破棄を皇帝に進言した。

かゝる決定の責任は主としてホルシュタインに在るとビスマルクは主張し、爾後彼はビスマルク家の人々からは叛逆者又は主敵として非難された。然し、ホルシュタインは外務省に於て着々實權を掌握し

て行つた。帝國の祕密を知つてゐる點に於ては省内に彼に比肩するものなく、次官の休暇中は常に彼がその任務を代行するといふ狀態であつた。ベルヘム伯は新政府の下に暫時留つてゐたが、外相の主たる助言者としての彼の地位をホルシュタインが蠶食しつゝあることを悟つて辭職し、もつと禦し易い人物と交替した。かくてホルシュタインは彼の官界生活の晩年を汚辱することとなつた越權行爲を愈々實行し始めた。エッカアトシュタインが一八九一年外務省入りをした時、彼はホルシュタインが彼の好まざる在外使臣からの重要な公文書の控を取つてゐることを知つて當惑した。彼の同僚並に部下に對する猜疑は年と共に嵩まつた。カプリヴィすら彼には一目置いてゐたと云はれる。彼の同僚の一人は彼を評して、若し彼が伯林からマドリッドへ行かうとすれば、彼はエルサレムへ廻り道するであらうと云つた。彼は決して寫眞を寫させず、倶樂部には一つも加入せず、未知の人に遇ふ氣遣のない二三の家を訪問するだけであつた。當時の英吉利大使館員 Sir Rennell Rodd が彼を露骨に揶揄した時、彼は官務が人間としての彼を損つた (Der Staatdienst hat mich als Mensch verdorben) と答へた。(註七) 彼が常に裝鎮した拳銃を携帶したことも彼の猜疑的一面を物語る。或る英吉利人は彼を評して最も親切で寛大な人物であつたが、極端に神經質で誰も氣にかけない事柄を憤慨することが屢々であつたと云つてゐる。

カプリヴィとその同僚に對するビスマルク派の新聞の攻擊は間斷なく繼續されたので、ホルシュタインはいつか彼のことが明るみに出されるのを怖れた。一八九四年 Kladderadatsch といふ伯林パック誌

は數週間に亙つてホルシュタインとキデルレン・ウェヒターとフィリップ・オイレンブルグ伯の三人を夫々 Austernfreund（牡蠣好き）Spötzle（雀）Graf Troubadour に漫畫化して漫畫漫文を連載した。最初はこの漫畫中の三人組が誰と誰であるかを讀者は知らなかつたが、回を重ねるに從つてそれが右のホルシュタイン外二名であることを知るやうになつた。かうして充分な準備を整へて置いて「燃ゆる爐中の三人男」と題する寓話を掲載した。その大意は、「昔多勢の忠義な家來を持つた一人の王が居た。然しその中三人だけは腹黑で、最も忠義な家來達を數人罪に陷れて、宮廷の勢力を乘取つた。そこで一人の正義の人物が奮起して三人の惡者を燃ゆる爐の中に投げ込んだ」といふのであつた。ホルシュタインはこの事件の背後的人物の追求に躍起となり、ヘルベルト・ビスマルクの樣子を探つたり、雜誌の編輯者や發行者を調べたりしたが徒勞であつた。そのうち Frankfurter Zeitung にこの三人の眞當の名前を素破拔き、彼等が皇帝とビスマルクの疎隔を擴大したと非難した書簡が掲載された。そこで問題は益々紛糾し、血鬪沙汰迄起し、ホルシュタインは Graf Henckel von Donnersmark を首謀者と睨んで血鬪を申込んだが、事實無根なりとて拒絕された。この事件を以つて攻擊は終熄したが、ホルシュタインの猜疑心に一層深刻な痕跡を止めたことは云ふ迄もない。

この當時ホルシュタインは外相の任命に對して隱然たる勢力を占めてゐた。マルシャル男が外交には全然門外漢であるため、いづれは交迭を豫儀なくされるものと誰しも考へてゐた。ホルシュタインとキ

デルレンとは Bötticher が内相を辭任すれば、その後にマルシャルを持つて行き、外相にはオイレンブルグを持つて行かうと考へてゐた。然しオイレンブルグは自ら不適任と考へて外相の地位を希望しなかつたので、彼はホーエンローエ公を訪れて、自分を外相に推薦しないやうにホルシュタインに執り成して呉れるやう懇請した。ホーエンローエは話して見やうとは云つたが、ホルシュタインが意見を變へるだらうとは考へなかつた。(註八)

ホーエンローエ公は屢々ホルシュタインを訪れて政治上の意見を交換してゐたが、彼の日記の一八九三年十二月十五日の條には、公が政府の外交政策に對するビスマルク派の新聞雜誌の攻擊に就いてホルシュタインに語つた時、ホルシュタインは伯林會議を始めアフガニスタンに於ける英露の紛爭防止並に對露政策の全部等ビスマルクの誤謬を强調し、オーストリヤを動搖の狀態に置くことは獨逸を甚く卑劣となす結果、孤立に陷らしめ、結局露西亞に追隨せしむることとなるであらうと答へたと記してゐる。一八九四年の始めにカプリヴィ内閣の締結した通商條約のために、露西亞から輸入する穀物に對する關稅が引下げられる結果を怖れた農業家の憤激に遭つて、内閣の地位が動搖を示した。その上皇帝とビスマルクの和解の徵向が不安を增した。ビスマルクが病氣見舞として皇帝より下賜された葡萄酒と全快の祝詞に對する御禮を言上するため參内することになつた時、外務省にはビスマルクが後繼首相に就いて内奏するかも知れないといふことを心配する者が多數あつた。ホルシュタインは勿論その一人であつた

が、ビスマルクの謁見は何等彼等の懸念に値しないものであつた。

カプリヴィは皇帝と保守黨の信頼を失つたので一八九四年十月潔く辭職した。彼は既に以前からホルシュタインを信用せず、彼の室を「毒物店」と呼んでゐた。皇帝は後繼首相としてオイレンブルグを考慮して居り、萬一オイレンブルグが辭退した場合は Bülow を、と考へてゐた。それに對してホルシュタインはホーエンローエの首相就任を熱望してゐた。それは單に兩者の友誼のため許りでなく、既に七十四歳の老公が彼と權力を爭ふやうなことはないと考へたからであつた。ホーエンローエの首相就任にホルシュタインが如何なる策動をしたか詳しいことは判明しないが、ホーエンローエが皇帝の招電に接してポッダムに向ふことになつた時、態々ライプチッヒに公を訪ねて大命を受諾することを勸說したといふことである。ホーエンローエが首相就任後間もなく、ビスマルクに敬意を表するため彼を訪問した時、ビスマルクはホーエンローエを歡迎し、種々の助言を與へた。中に、「貴下が直ちにベチッヘル、マルシャル、ホルシュタインの三人を除外しなければ、彼等は余に對してなしたと同樣に貴下の放逐を劃策するであらう」と語つた。

ホーエンローエ公在任中の二つの重大事件は極東と亞佛利加に於ける干涉であつた。前者は日清戰爭の結末をつけた下關條約によつて日本が得た遼東半島を、佛露と共に日本を强迫して返還させた事件であつて、後者は外交史上有名なクリューゲルに對する祝電事件である。對日干涉の動機は露佛同盟の成

立と、一八八七年の祕密同盟の消滅によつて損はれた露西亞との親交を恢復せんとするにあり、ホーエンローエは極東に於ける露西亞の野心を助長することが露西亞に於ける厚意を贏ち得る最善の方法と考へた。同時に露西亞が旅順港を手に入れる代りに獨逸は膠州灣を得て極東に於ける通商上の足場を固めるといふ一石二鳥を狙つたわけである。然しそれは完全な失敗であつて、露西亞は期待通りの友誼を獨逸に對して取戻さなかつたし、日本の國力とその怨恨の程度の測定にも誤があつた。この三國干渉の交渉の衝に當つたのはホルシュタインであつた。彼がこの政策を支持した理由は露佛同盟に血の洗禮を施すことを避けやうと望んだからであつて、彼は假令日本が露佛の命令には反抗するとも、獨逸の後押しがあれば服從するであらうと信じた。その上彼の考は露西亞の勢力を極東に伸張させることによつて、歐羅巴に於ける汎スラヴ的野心を緩和しやうといふに在つた。青島租借條約の最後の草案はホルシュタインとチルピッツによつて起草された。(註九) 極東問題に主役を演じたホルシュタインは亞佛利加問題には全然關係がなく、クリューゲルに對する皇帝の電報によつて甚しく損はれた英吉利の對獨感情を引戻すことに駐英大使ハッツフェルトを助けた。

一八九七年マルシャルは駐土大使に轉出し、ビュウローが外相となつた。新外相の父は數年前ホルシュタインに、自分の亡き後は息子を宜敷賴むといつたので、ホルシュタインは最善を盡してその依囑を實行した。然しビュウローの外相任命はオイレンブルグの工作に依るものであつて、ホルシュタインは

それに不贊成で、若しビュウローが將來首相たらんと欲するならば、現在は伯林を離れた方がよいとの意見であつた。彼のこの意見は容れられなかつたが、相變らず彼は新外相の下で勢力を振ふことが出來た。ビュウローは二十年間の外交上の經驗を有したが、ホルシュタインの智識と才能には喜んで順應した。「余は人事と新聞と政治警察に手をつけなければならない」とビュウローは語つたが、人事に關してはホルシュタインと意見が一致しなかつたが、一八九八年に遂に彼は必要と考へた更迭を斷行することが出來た。ホルシュタインはこれに異論が唱へて八週間も缺勤したが、結局彼の讓歩によつて落着した。

ブュウローの外相在任中の主なる問題は英獨關係であつて、ホルシュタインが主としてその衝に當つた。クリューゲル電報によつて招來した英吉利の憤慨は相當深刻ではあつたが、埃及に於ける英吉利の立場を序々に援助することによつてそれは表面上緩和された。當時英吉利は埃及に於ては佛蘭西と、極東に於ては露西亞と對立してゐたため、英吉利は獨逸との一層密接なる關係を希望した。この精神はポルトガル殖民地を兩國の勢力範圍に分轄した一八九八年の條約に現はれた。對英交渉はホルシュタインの採配の下に駐英大使ハッツフェルトが行ひ、翌年にはサモアに關する困難な問題の解決が兩人の手に委ねられた。ホルシュタインの氣質は込み入つた外交接衝には適しなかつたので、交渉が抵頓した時、彼は速かに協定が成立しなければ皇帝は交渉を打切るかも知れないと英吉利側に威嚇的通告をなした。ソーリスベリは威嚇されて交渉を繼けることは當然好まなかつたが、ベーア戰爭が起つて英吉利の驅引上

の立場を弱めたので、サモアを獨逸と合衆國の分轄に委ねることにした。

チェンバレンが若し獨逸が英吉利の接近を拒否すれば、英吉利は露佛との抗爭を解決する積りだと仄したといふことを、エッカルトシュタインが報告した時、ホルシュタインはエッカルトシュタインを愚直だと云つた。ホルシュタインはペルシャ灣に於ける大々的讓歩をしなければ英露關係は好轉せず、それは英吉利の堪へ難いことであると考へた。斯る前提から出發し且つソーリスベリが獨逸の頑强な反對者であるとの信念から、彼は再三提案された同盟を承諾することの出來ない理由を發見した。彼はチルピッツやレヴェントローの如き親英家ではなくビュウロードと同樣に獨逸の地位は飽迄三國同盟によつて維持すべきであると信じ、英吉利と協定を結ぶことが殘存してゐる露獨の親善關係を破壞することを怖れた。その上彼は獨逸の新聞が旺んにベーア人に對する同情を煽つてゐる時に英吉利と同盟を締結することに不安を感じた。そこで彼は英吉利に對して三國同盟への加入を提議し、それに關する交渉をウキーンに於て行はんことを提案した。獨逸との締盟を熱望してゐたチェンバレンも不本意乍らそれに同意したソーリスベリもホルシュタインの代案には反對で、彼等は獨逸政府が彼等を翻弄するものと考へ、この信念はトランスヴァルに於ける獨逸人財產の辨償要求や支那海關の引上げ等の問題によつて一層强められた。

ホルシュタインの斯の如き横槍は、對英交渉の衝に當つてゐたエッカルトシュタインと駐英大使ハッ

ツフェルトとを怒らせた。エッカルトシュタインがこの問題に就いて皇帝に談合した時、皇帝は明瞭な返事を與へたが、何分にも皇帝は交渉の經緯に就いて報告を受けて居らず、外相ブュウローはホルシュタインに壓へられて居たので、エッカルトシュタイン等はホルシュタインの猜疑心と嗜虐的處置に失望を感じた。エッカルトシュタインは「ホルシュタインの上官等は一種の紙人形の政府を形成してゐて、ホルシュタインは彼等に報告や通諜を見せることもしなかつた。彼はこれ迄獨逸政界の舞臺や舞臺裏に現はれた最も神祕的な人物の一人であつた。自分は屢々彼の命令で重要な交渉を開始したが、相手方が協定しさうになるや否やそれを破棄することを命じた。彼は相手がそれを望まない間だけ、それを望むに過ぎない。交渉が圓滑に進捗すると忽ち彼は猜疑的になる」と述べてゐる。一九〇一年初めホルシュタインはソーリスベリが抑壓される迄は英吉利側の誠意ある接近を期待出來ないと語り、「余は貴下が同盟に就いて一語も洩らすことを禁ずる。その時機はやがて到來するとしても、それは未だ來ない。若し英吉利が露西亞との提携を欲するならば、彼等はそれを試みるのもよい。それは羊と狼の協定となるであらう」と一九〇一年三月十七日にエッカルトシュタインに書き送つた。彼は若し英吉利を三國同盟に引込まなければ、獨逸の敵はその同盟國の一つを攻擊することが出來、獨逸は英吉利に援助の義務を負せないで戰爭を始めねばならないと考へて、頻りに英吉利を三國同盟に引込むことを主張した。然し英吉利が方針を變更したのは主として上述の如きホルシュタインの妨害に歸因する。そして英吉利は却つ

て佛露への接近を早めた。

一九〇〇年ホーエンローエが首相を辭した時、ホルシュタインの最大の不安は父の死後皇帝と和解したヘルベルト・ビスマルクが後繼首相となることであつた。然しそれは實現されないでビュウローが後繼首相となり、外相にはホルシュタインが辭退したのでRichthofenが任命された。ホルシュタインはリヒトホーフェンを好まず、彼の外相就任には反對運動をしたが效を奏しなかつた。

彼の官界に於ける經歷は一九〇四年に彼がその地位を甚しく濫用したことのために著るしく破綻に頻してゐた。來るべきキールの短艇競爭の際英帝のために催される晩餐會に於ける獨帝の挨拶の草稿は常例により外務省に於て起草された。この草稿はホルシュタインが起草した許りでなく、彼は外相の閲覽承認を經ずしてそれを發送して仕舞つた。外相リヒトホーフェンがそれから十分後にホルシュタインの室に來て、草稿の閲覽を求めた時、既に發送したことを告げられた。ホルシュタインのこの越權行爲は外相を大いに憤慨させ、その場の樣子を目擊した次官Hammannは既にキールに赴いてゐた首相に手紙を以つて經緯を報告した。ホルシュタインは飽く迄外相リヒトホーフェンが嫌ひで、外相は職務怠慢であるとて彼の被免を首相ビュウローに要求したが、流石にビュウローはこの傍若無人の要求には耳を藉さず、ハンマンに命じて兩者の和解を試みさせた。兩者は職務上澁々協力したが、この場合ホルシュタインの態度は徹頭徹尾陰險であつた。

日露戰爭を動機として露獨同盟の交渉とその同盟への佛蘭西誘引が劃策された。その目的は歐羅巴大陸のブロックを結成することによつて日英に對抗せんとするに在つた。一九〇四年十月三十一日、卽ち露國バルチック艦隊が北海に於て英國魚船を砲擊した事件が起つてから數日後に、首相官邸で會議が開かれ、席上ホルシュタインは獨帝の使嗾により露西亞との同盟締結案を提唱し、且つ露獨は佛蘭西を壓迫して同盟に加入させるといふことを附け加へた。ホルシュタインの提案には參謀總長も海相も外相も悉く反對であつた。チルピッツは佛蘭西の頭に拳銃を擬することは佛蘭西をして獨逸の目的のためにその軍隊を動員することを納得せしめないであらうし、且つ又露西亞との同盟は英吉利との戰爭の危險を增加し、英吉利との戰爭には獨逸の海軍が劣勢であるため獨逸は敗北するであらうと說いた。然しホルシュタインは頑强に自說を固執し、反對を無視して條約の原案を作り、翌年の夏 Björko 協定を締結した。

モロッコ問題に關してホルシュタインが採つた政策は何人もその失敗を認めた。一九〇三年五月英帝が歷史的巴里訪問をした後、ホルシュタインはモロッコ問題に關して英佛の協定が成立する筈がないと考へた。一九〇五年のタンヂールに於ける獨帝の示威は決して皇帝自身の本意より出たものでもなく、ビュウローがその回想錄中に述べてゐる如く彼自身の發案でもなく、實にホルシュタインの發案によるものであつた。但しタンヂールに於ける皇帝の演說はホルシュタインの立案ではなく、それを讀んだ時

彼は精神的衝撃を受けた。然しホルシュタインが佛蘭西は戰爭を欲せず、露西亞は日本との戰爭に沒頭してゐて他の戰爭をなし得ないと信じて、高壓政策の强硬支持者であつたことは確である。

首相ブュウローはホルシュタイン程熱烈ではなかつたが對佛政策に就いてはホルシュタインと同意見であつた。彼はモロッコ問題で佛蘭西が獨逸と戰爭する場合に英吉利が佛蘭西を助けるとは全然信じなかつた。

モロッコ問題が一九〇六年一月アルヘシラスに於て歐羅巴の列國會議に附された時、ホルシュタインは飽迄彼の計畫を實行する決心であつた。會議が警官の管理問題で停頓し三月となつた時、ホルシュタインは數ケ月後には佛蘭西が更に軟化すると見て、討議の打切りを希望した。彼はその前にオーストリヤが提案し、獨逸首席代表 Radowitz の承認した妥協案を拒絶してゐた。首相ビュウローはこの頃漸くホルシュタインの火遊びに氣付き始め、獨自の見界に基き三月警官の管理に關する新なる妥協案を承諾した。それはホルシュタインに取つて將に晴天の霹靂であつた。

一九〇五年秋ホルシュタインは外務省の情報部が彼のモロッコ政策を支持しないと不平を洩した時、次官ハンマンは强硬政策に對する輿論が熟しないから警戒を要すると答へた。そこでホルシュタインは例によつて情報部長を彼の部下となすか、彼を辭めさせるかを要求した。首相は苦慮した後、情報部を彼の配下に置き、辭表は受理もされなければ徹回もされなかつた。佛蘭西大使館一等書記官からホルシ

ュタインが在官する限り協定は不可能であるとの報告が到來し、モナコ公からも同樣の意味の書簡が來た時、オイレンブルグはそれ等を首相に提示した。一九〇六年一月外相リヒトホーフェンが辭職したので、Tschirschkyが後任に任命された。新外相は斷然ホルシュタインの專横を斷壓する決心を固め、ホルシュタインの室から外相の室に通ずる扉に鍵をかけた。かくて一九〇六年四月二日ホルシュタインは首相に辭職を申出た。これより先一九〇六年一月ビュウローはアルヘシラス會議後ホルシュタインと袂を別つ決心であることをハンマンに語つた。そして彼が四月五日國會に於て卒倒する數時間前に彼の命令によりホルシュタインの辭表は外相チルシュキーによつて皇帝に提出され裁可された。かくて獨逸外務省の惑星は遂ひに地に墜ちた。外務次官ハンマンは首相ビュウローの健康を害したのはモロッコ問題よりもホルシュタインとの鬪爭であつたと語つた。ホルシュタインの沒落は巴里に於て歡呼を以つて迎へられ、Journal des Débats は彼をビスマルク以來の最も危險な佛蘭西の敵であると斷じた。

本稿は主として G. P. Gooch, Baron von Holstein (The Cambridge Historical Journal, vol. I., No. 1) に據れり。

（註一）Busch, Diary, II 59—61

（註二）Emil Ludwig, Bismark. P 447

（註三）Eckardstein, Erinnerungen, I. 22—23

（註四）Hohenlohe, Denkwürdigkeiten, II. 274

（註五）Ereignisse und Gestalten, VI

（註六） Hohenlohes Tagebuch 一八九〇年三月二十七日
（註七） Rennell Rodd, Social and Diplomatic memories, P. 135
（註八） Hohenlohes Tagebuch 一八九三年一月十三日
（註九） Tirpitz, Memoirs, I. 75